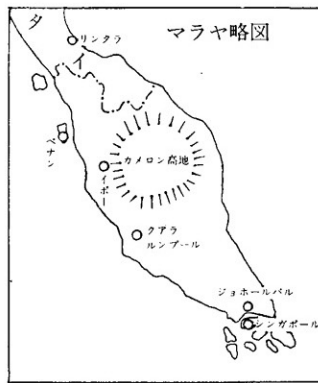


マラヤ地質調査所

1960年10月29日土曜日 4時きっかり 頼んでおいた時刻どおり ポーイが戸の陰から 静かに起こしてくれる。 インドでもビルマでもタイでも こういうしつけはよくできている。 5時定時に タイ航空のミニバスが迎えにくる。 プリンセスホテルで20分間カナダのお嬢さんを待つ。 その間 タイ人のお客は何もいわない。 これが西の方だと けんけんごうごうエンゼツが出るところだろうが。 6時15分空港着 税関は何も見ず 何もありませんか OKです。 あなたはビルマの袋(金色で チェン技師から贈られた)を持っているからビルマ人のようにみえますと笑う。 7時15分 タイ航空のDC 3はドンムアン空港を離れる。 機内には小さな扇風機 朝のバンコックのまちは美しい。 やしの並木がトラネリの頭のようにだ。 10時2分 プケット空港着 日本人が3人降りる。 これは婦人1人を混じえた数人が出迎えていて日本語でアイサツをしたので はじめて邦人とわかったらしい。 海岸に接して ラテライトのランウェイ 26分後に出発 11時50分 タイの最南の空港ソククラ着 出入国管理事務所で大福帳にサイン 米国人の客が多いのは 米国の援助を多く受けているこの国らしい。 30分後出発 タイとマラヤの国境をいつのまにか越えて 13時15分ペナンに着く。

海沿いに 赤い小さな家がきれいに並んだ島 空港での事務は きわめてかんたんで 3人の係官がきばきと事務を運び 1週間滞在の予定というと 2週間でもかろうとあっさり記入してくれる。 税関吏は婦人で



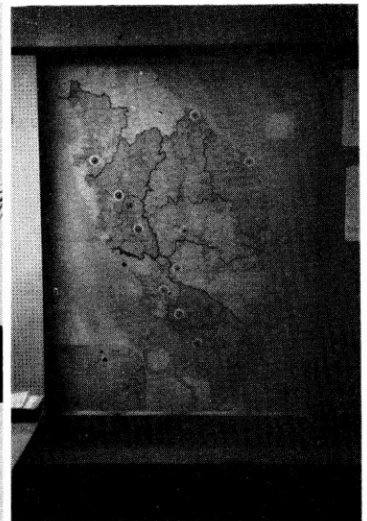
これもきわめてかんたん マラヤ航空の事務所に行くと ここからの乗客は3人係員が イポーへは電報より電話がいいと 自分で地質調査所長のアレキサンダー博士に電話してくれる。 博士にホテルの心配をしてい

ただく この空港はコンパクトで すこぶる清潔 ランウェイもきれいに舗装してある。 ペナン フライングクラブと書いた軽飛行機がふわふわと飛び 待合室の窓外には 燃えるような朱色のブーゲンビリヤ カンナブツソウゲが咲いている。

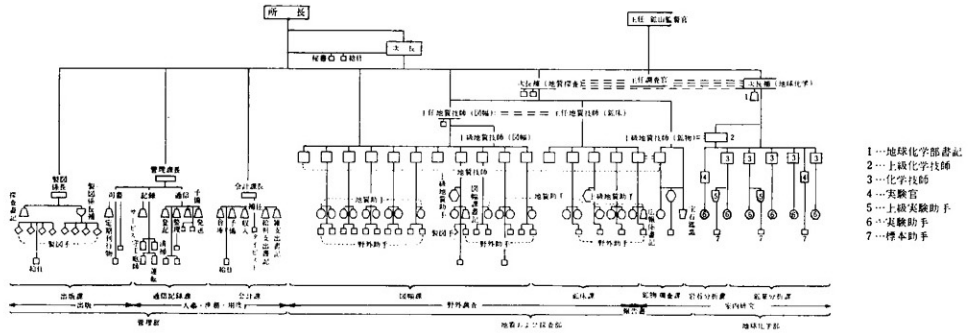
15時30分 今度はマラヤ航空のDC 3に乗り込む 慎重なテスト キャプテンは オーストラリア人の老パイロット 40分に離陸 すぐ海上に出てまた陸に入る 密雲 非常に低く飛んでいるのだが視界はなお悪い 石灰岩の丘のいただきより低く 白いがけとがけの間をひろって飛ぶ スズの採取場がたくさん見え 鉄道と道路が何度も交差して続いている。 16時10分 イポー着 ハンマーとクリノメーターをつけた青年に地質調査所の人かと思って英語で話かけると 向こうも英語で 日本商社の技師だと返事をする 税関はたんねんに調べ おまけに航空会社のサービスはないという タクシーをひろってホテルへ行き 夕食後まちを散歩する。 大きな市場はコンクリートの床で清潔である くだものは 西洋ナシ リンゴ ザクロ クリ ピーナツ パナナ パパイア パイナップル ドリアン ナンカ ランプタン ヤシ サオウ オレンジなど 商店街は華僑ばかり 雑誌 書籍は中共側のものが多い 日本製のカメラ 8ミ



マラヤ連邦地質調査所 イポー本部



所長室にある本部・支所の所在地を示す地図 (○印)



マラヤ地質調査所組織表

り撮影機 フィルム また冷蔵庫 ラジオ プレーヤーなどの電気器具も多く見られた 英語の雑誌 書籍の露店はみなインド人 三船敏郎や池部良の映画もかかっていたし 日本人形をたくさん売っている店もある。

翌30日は日曜日だったが アレキサンダー所長は「お前の忙しいのはよくわかっているし 自分の金で旅行するのは容易でないから 今日所内を案内しよう」とお忙しい中を自らカギを持って人気のない所内を一へやつ見せて下さる。この建物は繁華街からはるかに離れた郊外にあって 広い敷地にゆったりとした2階建て 隣に鉱山研究部が並ぶ 周囲は所長や幹部級の人たちの住宅。

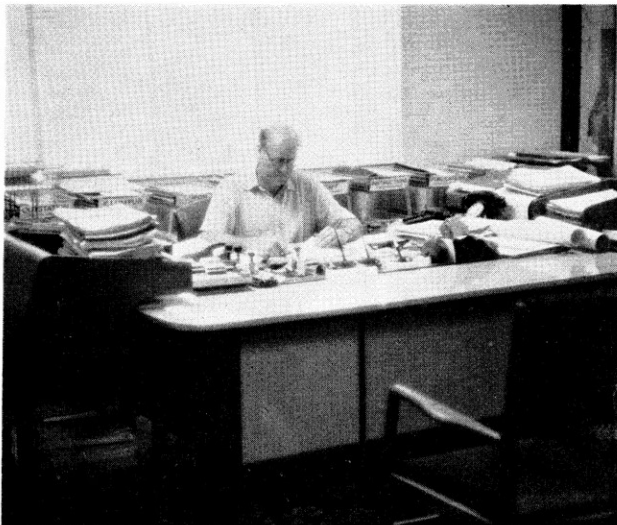
1957年開設 簡潔でスマートな建物である。所長はむだなへや一つもないといわれたが そのとおりである。パスカルのパンセの言葉が壁にかかっている。首府から飛行機で1時間という距離にあって 仕事の上でさしつかえないのかと聞くと 利不利はもちろんあるが 利益の方が多い。会議も首府にあれば何にでも引き出されるが とかく会議というものはむだが多い。ここにいれば 遠いからと許してくれて 本当に大切な会議にだけ出ればよい。月1〜2回首府に行く 日本の地質調査所は良い所にあるとのことだった。

組織は 別表のとおりであるが 現況は必ずしもこの表とは同じではないようである。現在 所長の下に次

長 その下に2人の次長補がいて それぞれ地質・探査地球化学を担当する。地質・探査担当の次長補の下に2人の主任技師がおり 図幅と鉱床を分担し 図幅には6名 鉱床には3名の地質技師が従事している。

地球化学の次長補の下には上級化学技師1名がいて その下に化学技師2名 3年契約の化学技師 化学技術者の実験官各1名がいる 化学技師の下には 実験助手5名が分析に 実験助手補3名が標本の破碎に 実験室小使2名が清掃に従事している。主任技師以上の幹部はすべてヨーロッパ人である。支所は各州に1カ所以上おくことになっていて すでに6カ所に設けられている。支所駐在の地質技師は6名で それぞれに地質助手2名 地質助手補1〜2名を有し 主として 図幅調査を行なう。これらの助手は中等学校卒業者を所員が訓練し 1〜25年の経験を有する。製図室には製図手6名がいるが 地形測量 地球物理の技術者はいない。

所員は 現在地質技師が20名でそのうちヨーロッパ人16名 シナ人3名 インド人1名 化学技術者は5名でシナ人4名 欧亜混血人1名 地質助手20名 地質助手補20名 技術助手11名 以上いずれも主としてマラヤ人 実験助手・同補の10名は大部分はシナ人で若干のインド人を混じえ 速記者 タイピストを含む一般書記職が23人でシナ人およびインド人 雑務に従う10名は 主とし



所長室のア所長 この部屋のデザインは彼自身のもの うしろに色別にした書類送箱が宛先別にいらんでいる



所長室のボード この壁は左・右に移動する

てインド人となっている。ヨーロッパ人は 1965年までに退去する予定であるため 長期間かかる図幅調査からこれらの人たちをひきあげて 本部に呼び戻しつつある。この地質調査所は訪問した当時 地方工業開発省に属し 予算は年間約1億2千万円で このうち給料が8千4百万円 野外調査費2千4百万円 室内作業その他に1千2百万円となっている。

野外調査の場合 コックの費用は個人もちで 日当は最高10マラヤドル (約1,200円) 幕営の時はこれに1日2マラヤドルが キャンピング (ジャングル) 手当てとしてつく 事務をとる時間は 8時30分~13時 14時15分~16時30分 ただし回教の断食月には 8時~13時 土曜日は8時30分~13時である 年次休暇は マラヤ人は4週間 ヨーロッパ人は2週間と3年間に5カ月の休暇がある 病気休暇は不定で 状況による 休日は年に約10日 所の仕事として目につくものに 鉱業と農村開発との調整がある 約10年前から各州政府は 農村開発を開始するためには その地域は将来鉱業開発の可能性が少ないという証明を地質調査所長と主任鉱山監督官からとらねばならぬことになっている。このため鉱物開発可能性図というものを作っていて これがさしあたって非常に重要な仕事となっているようである。この証明を出す時は 担当官に聞いてくるわけであるが 資料の有無で大分答に精粗があり ときにはこのための調査試錐なども行なうが ごくあらひ結果で答えることもあるという。

所長室はゆったりとしていて 穴あき板を用いた壁面は動かすことができ 地質図 所の組織表 作業計画表 作業分担表などがはってある。所長室と次長室は一室をはさんでとなり合っている。間のへやの外側は所長と次長の仕事べやで製図板などを置き 内側は秘書 速記者のへやで輪転とう写機もある。所長のいすの後ろには 宛名札のついた書類かごが 宛先別に色分けして

重ねてある。所長がそれぞれのかごに入れておけば メッセージはすぐとり分けて まちがいなく配って歩けるというわけである。

庶務室には 今までの書類が年度別に箱に入れられ 調整自在の鉄製の棚に納めてある。英語はもちろんマラヤ語もローマ字を使っているので 書類はすべて欧文タイプライターで処理することができる。

ゆかにマラヤの地形図がモザイクで描かれ 映写装置もある図書室は 所長のデザインによるもので 閲覧用の机といすは 上級職員のお茶をのむ所ともなる。

蔵書は今のところ少ない。野稿図がきちんと製本され保存してあるのが目につく。ソ連出版物の英訳されたものがあつたが 所長は 「ロシア語のわかるものはいないが ソ連からも学ばねばならないので 私たちはこの米国で訳されたものを有用としている。日本の地質調査所には ロシア語を訳す人がいるとは 恵まれたものだ」といわれた。

図幅調査は 1957年に10班が4週間に 1,300 km² 1959年には11班が8週間で 1,560 km² の作業を行なった。全国の8分の3が調査済み 8分の1が出版済み 1960年8月現在 6人の地質技師が図幅調査に従事しているが うち4人が英国人 2人がシナ人で 1961年1月までにこれが 英国人3 シナ人2 インド人1となる予定で 前述のとおり1965年のヨーロッパ人退去にそなえ 時間のかかる図幅調査作業からヨーロッパ人を引き揚げつつある。野外調査は1カ月のうち2週間が費やされる。調査は 航空写真 (高度5,000 mくらい) が厚く茂った植物のためあまり役に立たず もっと縮尺の大きなものが要するという。こうした航空写真では 沼沢地などは水がどちらへ流れているかわからず 写真からの河川図——これが最も精度の高い図なのであるが——を使う場合 川が逆に流れているように書いてある部分もあるということである。だいたい 写真に示したよ



地質調査所内の食堂



庶務室 年度別の書類入れ紙箱の棚

うなコンパスで スケッチして目測の距離で書いてゆかなくては 時間が間に合わないとのこと その結果の見取図と観察点の記載をした紙とが製本され図書室に保存してあるのは 前述のとおりである。支所もおもな仕事は図幅調査で 所全体として図幅調査には重点をおき人と時間をかけて まずこのような基礎的な仕事を着々と実施しているのは アジアの国としてはむしろ例外的なものといえよう。

鉱床・応用地質関係では 最近3年間にカナダの会社によって空中磁気調査を行ない 現在鉄関係の地質技師が1名おり また粘土鉱床の調査を行ない カメロン高地の水力発電計画に地質技師1名が従事している。

化学課の実験室は2階にある。その入口付近にホイストがあり 建物の外にもだすことができ つけあげたものはすぐ格納できるようになっている。酸類の格納庫にはファンをつけ 入れ物のこわれた時はすぐ水をながして洗いさるようになっている。分析試料はタバコの空缶に入れ 特別のものを除き1年間保存実験室の換気は各ドラフトを大きな管でつなぎ 床の上にも換気管が走っているが これは英国の換気専門家の設計にかかる由。大きく開いた窓にそって実験台がならび窓外には緑の景色が展開する。とてもいい実験室だとほめると ア 所長は「難は実験台の表面がやけてマークのつくこと 床がセメントを使ってあるため酸などに犯されることだ」という。天秤室には日本の守谷製作所の天秤が数台ならんでいて 戦時中から1台残っていたものが大変具合がいいので さらに注文して使っている由 分光分析機はないが 農林省にあるので ここに頼み仕事の上で相互に利用し 刺激あっているとのこと。

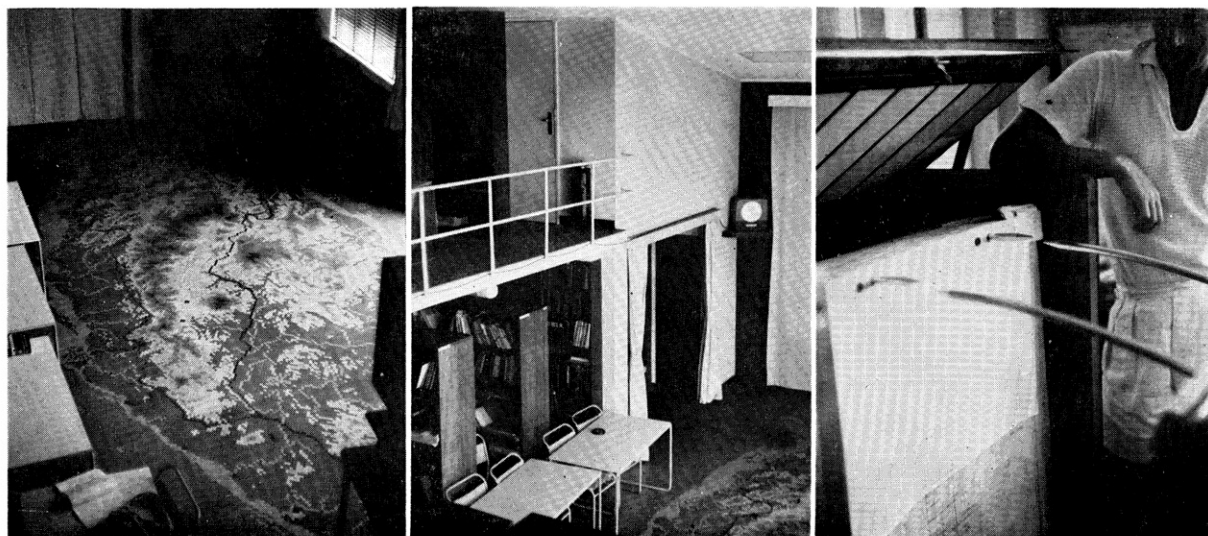
陳列室は所全体の面積の割合からするとかなり大きくゆったりとして明るい。陳列法もみやすくあかぬけし

ているが これもア所長の設計だという。ここにもまた穴あき板を活用して標本をのせる小棚の位置が 自由にかえられるようになっている。採光は蛍光灯のほか窓からと鋸天井の天窗からの自然光によっている。いままでにみたアジア各国の地質関係の陳列室のうちではインドのバーバルサーニー古植物研究所のものと双へきをなすが 両所ともその所長が芸術を愛し 所内を機能的に美しくすることにきわめて熱心な権威ある人々である。化石は大英博物館または小林貞一教授に送っている由。製図室では図の保管に写真にみるようなV字形に開く四つ爪のケースを用いていることが珍らしく また2階の廊下に裏打ち用の大きな木の板があって これは壁から離して両面がつかえるようになっており 使わぬ時は壁におしつけられる。外気に直接ふれる位置にあるので乾きもよいという 所長の設計による。

マラヤでも地質技師にはあまりなりたがらず マラヤ人の地質技師はようやく4年前はじめてできたそうである。今までずっと本部勤めだったシナ人の地質技師を将来上級の位置についた時のことを考えて 2年間実地の仕事をさせるため地方に派遣してある由。この地質調査所は小さいけれども本格的に仕事をしていること 機能的な設備をもっていることなど 現在のアジア各国の地質調査所中の白眉といえるが 一方英人の調査所であって アジア人たちは彼等の下働きで 英人を畏敬しているという印象を与えられた。

しかし 英人は今真げんにマラヤ国民に仕事を引きつごうとしているし マラヤ側も英人を活用して着々実力を養いつつあるのは とかく理想にのみうかされて足もとが いいかげんになりやすいこうした新興国として まことにたのもしい限りであり 少なくとも地質調査事業からだけみれば アジアの国々のうちで もっとも有望な将来をもつ国の1つと思われた。

(沢田秀穂技官)



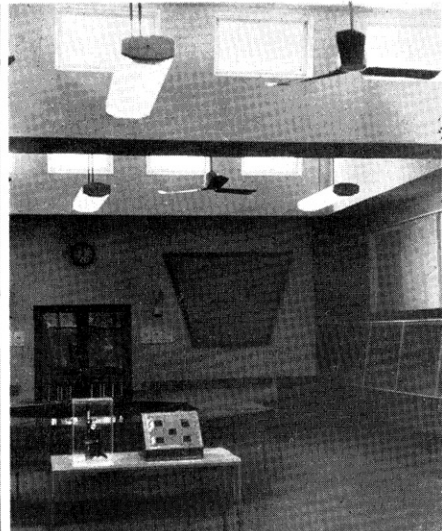
図書室の床 モザイクでマラヤの地形図を描いている

図書室(映写室ともなる)野稿図なども製本して保存してある

地図の保管 V型に開くタテのケースの両側に2本ずつの金属の大針がでていて4つの穴で保存している



マラヤ地質調査所の陳列館の一部 ア所長のデザインによる



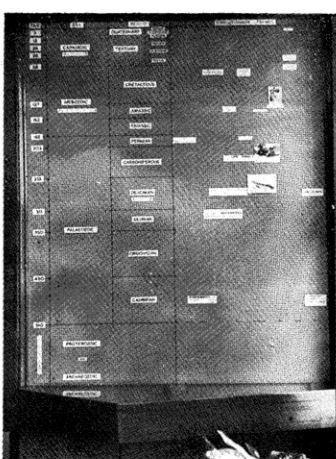
陳列館天井は蛍光灯と鋼状屋根からの天然光と2つの光源をもつ



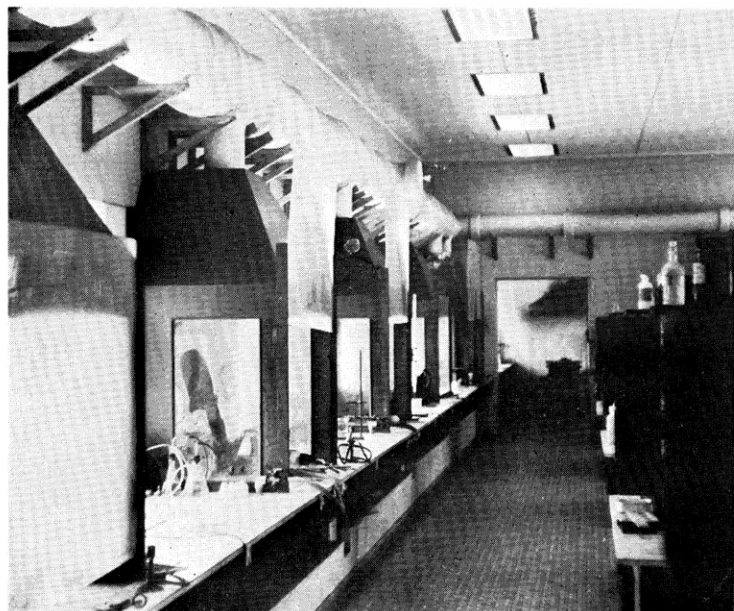
陳列館の一部



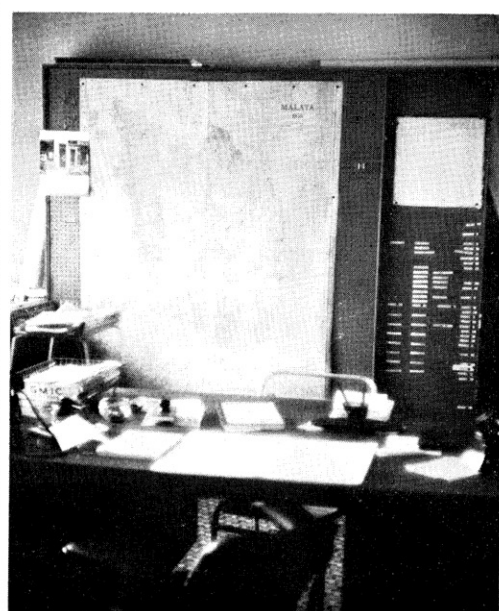
陳列館のショウウィンドの一部 穴アキボードで標本の位置を自由にかえることができる



陳列館の絶対年代表



化学実験室の一部 窓ぎわにドラフトがならび天井と床下に換気筒が走っている



鉱物調査上級地質技師の部屋 床はモザイクタイルでできている